

▼熊野古道中辺路街道にある「牛馬童子」。



▲熊野古道はいにしえより参詣道として庶民から貴族まで多くの人々が熊野を目指して歩きました。

国、県、市町村、そして民間が連携。全員が一つの舞台で考え取り組む。

他のパネリストの方々の話をお伺いすると、「シーニックバイウェイ」に取り掛かるための素地は、この紀南地域にはあるように感じました。石田先生の成功する4つの条件、それからギリギリの状態でもまちづくりに取り組んでいかなければいけない。どれもこれもこの地域にあてはまることだと思えます。

民間の立場では、道路というのは国、県、市町村と管轄が3つあります。この3つがあるからこそ三者が委員会を組織し、そこに民間も加わる。住民からとればこれが一番ありがたいなと思います。行政というが一番身近なのが市町村です。ただ、市町村だけではじ

▼熊野古道中辺路街道から見える高原地区の美しい田園風景。



▲田辺市内には古き良き街並みが今も残っています。

うにもならないことがあって、県国といくつかのステップを踏んで推進していきます。このシステムの良い面を活かして、全員が一つの舞台の上で物事を考えていければと思います。そんな取り組みは今までになかったことだと思えます。そういう意味では「シーニックバイウェイ」という活動にとても期待しています。



▶紀南地域での「シーニックバイウェイ」運動の可能性をお話いただきました。

コーディネーター



小田 章氏
和歌山大学学長。1971年大阪府出身。1971年和歌山大学経済学部へ赴任。2002年より現職。

地域の再生や振興に大学も関わる。つぎは「つぎのつぎ」地域つくりをいこう。



▲田辺市本宮の熊野本宮大社。

1978年にアメリカではじまった「シーニックバイウェイ」という運動は、「シーニック」という景色が良い、景観が良いという言葉です。また「バイウェイ」というのは寄り道や脇道という意味を持っています。基本的に道路から見ると景色だけではなく、その周辺地域全体の景観を道に軸にして考えていこうという意味です。この「シーニックバイウェイ」運動は、石田先生のお話からすると、地域の人も含めて様々な人がどのように絡み、連携するかによって、運動自体が生きるか死ぬかが決まるということです。紀南地域の担い手となる多田会長には、一



▲熊野那智大社・青岸渡寺へと続く大門坂。

級品のものが多くある北海道とは違ったこの地域で、北海道に追いつけ追い越せということを、行政のバックアップも利用しながら目指していただきたいと思えます。和歌山大学では現在、田辺市に「紀南サテライト」という場を作っており。この場は、県の人も地域の人も色々な人が入って、様々なことを話し合う場として作りました。大学の一つの役割として、地域再生、地域振興に関わるということが、国の政策としても言われています。ぜひ「紀南サテライト」という場を利用して、活発な議論をしていただければと思います。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたのが一昨年です。リピーターのお客様も徐々に少なくなってきたということとです。一過性的なものになるのを克服するためにも、危機的な状況にあるということを認識して、皆さん一生懸命活動されています。様々な状況を鑑みると、私自身



▲田辺市田鶴交差点で植栽のボランティア活動を行う方々。

「協争（きょうそう）」というのが必要であると考えています。コンペティション、つまり競い合う「競争」ではなく、時には協力し合い、時には同じく競い合うということがなければ、お互いが伸びないのではないかと。そういう意味では、紀南地域と北海道は、紀南は後から追いかけることになるのでしようが、「協争」という関係で、情報交換をしながら助け合っただけだと思っています。和歌山大学も和歌山の地にある大学ですので、ぜひ色々な形で皆さんとともにこの課題を乗り越えるために、いっしょに頑張ってください。



▶コーディネーターを務めていただいた小田学長。